様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　9 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520360
研究課題名（和文）オセアニアにおけるポストコロニアル文化形成と先住民・移民文学

研究課題名（英文）Postcolonial Formations and Indigenous/Immigrant Literature in Oceania

研究代表者
小杉　世　（KOSUGI SEI）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：40324834

研究成果の概要（和文）：　オセアニアにおけるポストコロニアル文化形成の諸相を、先住民・移民文学、メディア、先住民言語文化教育などによる共同体の形成という側面から検証した。ニュージーランド、オーストラリア、フィジー、パプア・ニューギニア、ヴァヌアツ、キリバス、イギリス（ロンドン）における現地調査に基づき、ローカルかつグローバルな文化形成の磁場に働く力を検討した。また、３言語版 CD 付属のマオリ語教材を作成することによって、研究成果の社会還元を行った。

研究成果の概要（英文）：This study examines the aspects of postcolonial formations in Oceania with a focus on the formation of communities through indigenous/ immigrant literature, media and indigenous language education. Based on fieldworks in New Zealand, Australia, Fiji, PNG, Vanuatu and Kiribati, this project investigates the local and global cultural formation sites. The project also contributed to the society by publication of a Maori textbook to introduce Japanese culture to Maori children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：文学　・　各国文学・文学論
キーワード：オセアニア、ポストコロニアル、先住民文学、南太平洋移民、マオリ、アボリジニ、先住民言語教育、共同体形成

１．研究開始当初の背景

文学研究の分野では、英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏といったもと宗主国の言語圏による壁が強く残っており、先住民言語や移民言語に通じたうえで多言語からなる文献を研究の対象とできる文学者は少ない。ガヤトリ・C・スピヴァク(Gayatri Chakravorty Spivak)が新しい地域研究の可能性として強調するのは、複数の非西洋言語に精通する文学研究者の必要性である。このような主張に共感する筆者は、H16 年度の在外研究の最後の４か月とその翌年度から受けた若手研究(B)の３年間の研究期間中に、ワイカト大学マオリ太平洋開発学科でマオリ語を習得し、

ニュージーランドの先住民教育機関やニュージーランドを中心としてサモア、フィジー、パプア・ニューギニアなどのポリネシア・メラネシア諸国における先住民・移民作家たちとのネットワークを築いた。本研究はその基盤に基づき、オセアニア諸語の運用能力をさらに開拓して、従来の文学研究者が入り込めなかった領域に切り込む視座を得ることを目指した。

２．研究の目的

これまでに築いてきた地域研究の基盤とマオリ語その他のオセアニア諸語の運用能力を生かして、先行研究の空白部分に切り込み、文学・文化研究の新領域を開拓すること、オセアニアにおけるポストコロニアル文化形成の全体像を描くことを目的とする。また、現地の教育の現場で使用可能なマオリ語教材を開発することにより、研究成果の国際的社会還元をめざした。

３．研究の方法

先住民言語教育機関や先住民医療機関での実地調査、地域の劇団やコミュニティの活動の視察、政府機関での調査など現地での調査や、作家・アーティストへのインタビュー、先住民教育機関の教育関係者や児童を対象としたアンケート調査などによって情報を得た。また、現地の大学図書館やニュージーランド・フィルム・アーカイヴ（NZFA）などに所蔵されているマオリ・南太平洋演劇の舞台記録や映画・ドキュメンタリーなど日本で入手閲覧できない映像資料を閲覧、分析した。本研究は文学研究の枠を超えて、社会的コンテキストの中で文化形成の議論をするために、学際的な方法を用いている。

４．研究成果

これまで地域研究の枠の中で個別に行われてきた先住民・移民文化の研究を超域的にとらえなおし、ポストコロニアル理論やネイション形成、文学生成の磁場論の観点から理論的に、また具体的な事象の分析を通してポストコロニアル文化形成の諸相を学際的に考察した。その成果は、業績一覧に挙げた学会発表や論文で発表している。マオリ語以外のオセアニア諸語の運用能力の開拓はその必要性が多岐に渡るゆえに多大な時間を要し、ライフワークともなるもので、まだまだ不十分であり、本格的にはスタートラインを切ったところというのが正直なところである。この点は次の後続科研の 4 年間の研究の課題ともなるが、少なくともこの 3 年間で、かなり研究のネットワークを広めることができた。論文や学会発表として公表していない分析の結果は、H25 年度以降の後続科研基盤研究(C)の 4 年間の研究期間中に、さらに調査を補足して、博士論文として発表する予定である。以下に研究成果の具体的な内容をテーマごとに記す。

（１）**＜教育の場における文化表象の分析＞**ニュージーランドの先住民言語教育機関における先住民言語文化教育における異文化（日本文化）の表象や普通科の学校の科学や数学などの教科書のマオリ語版と英語版に見られる文化表象の比較を行った。また、その他のオセアニア諸国（オーストラリア、パプア・ニューギニア、キリバス）において、英語その他の教科の授業や教科書のなかで、地域文化や先住民文化文学がどのように活用されているかを検討した。

（２）**＜ロンドンにおけるマオリの共同体形成の考察＞** マオリの伝統舞踏カパハカは、ニュージーランド国内のみならず海外在住のマオリの共同体形成にも大きな役割を果たしており、グローバルな場でのローカルな文化の展開をみせている。ロンドン在住のマオリが形成するパフォーミング・グループであるロンドン・マオリ・クラブ（Ngāti Rānana)とロンドンのマオリ語の幼児教育施設コーハンガ・レオ(Te Kōhanga Reo o Rānana)を訪ね、アンケートとインタビューによる意識調査を行った。

（３）**＜ニュージーランドのサウス・オークランドにおけるマオリ・南太平洋移民文化と共同体の形成に関する考察他＞**マオリ・南太平洋系移民の人口の多いサウス・オークランドでは 2010 年に設立されたマンゲレ・アート・センターなどが新しいコミュニティ形成の場として機能しており、Vela Manusaute その他多くのサモア・トンガ・ニウエなど南太平洋移民系の劇作家やアーティストたち、また、2008 年に設立された PIPA（The Pacific Institute of performing Arts）の学生たちや、詩を音楽などのポップカルチャーの領域に近づけた South Auckland Poets Collective のパフォーマンスなどの活動の場ともなっている。これらの新しい南太平洋移民系コミュニティの文化形成について論じた。(研究業績一覧の論文①)

また、2 年毎にウェリントンで開催されるウェリントン国際芸術祭その他のフェスティバルで上演されたフィジー系の舞台アーティスト Nina Nawalowalo や、マオリの代表的な劇作家 Hone Kouka やマオリ・クック諸島系若手劇作家 Miria George の最新作についても考察した。(研究業績一覧の論文①)

その他、中国系マオリ劇作家やシンガポール出身の中国系若手劇作家、スリランカ出身の若手劇作家などの受賞作や最新作も未公開のスクリプトで検証しているが、これらニュージーランドのアジア系劇作家の作品の分析の詳細は、後続科研の研究期間中の課題のひとつとなるだろう。

（4）**＜マオリ語演劇と教育に関する考察＞** ニュージーランドの劇団 Taki Rua が 1990 年代から継続して行っているマオリ語演劇の全国ツアー（マオリ語トータル・イマージョンの学校などを巡る）に関する調査を行った。劇団がもつアーカイブから過去の上演の記録の一部を見せてもらい、また 2011 年のツアーのチーム・メンバーに同行して、ウェリントンの高校を訪問し、ドレスリハーサルおよび上演後の劇団員と高校生のディスカッションの様子を視察した。（研究業績一覧の論文①）

（5）**＜フィジーにおける先住民演劇・文学・メディアと「国民文学」の可能性についての考察＞** フィジー大学で開催された The 1st Literary Festival に参加し、フィジー人とインド系フィジー人の異なるエスニック・グループからなるフィジー社会における「国民文学」の可能性について考察する機会を得た。また、フィジー語で書かれた最初の戯曲 *Lakovi*（2011 年上演の DVD とスクリプトが出版されている)についても論じた。（研究業績一覧の論文①）

（6）**＜ヴァヌアツのコミュニティ・シアターに関する考察＞** 医療（健康）問題や環境問題への意識の啓発、識字教育などの社会活動の一環として、ビスラマ語あるいは英語での劇の上演、地域コミュニティでのワークショップ、および、英語・ビスラマ語・フランス語・インドネシア語による映画やテレビドラマの制作を行っているヴァヌアツの劇団 Wan Smolbag Theatre の活動に関して、マネージャーにインタビューを行い、劇団が出版している映画やテレビドラマの DVD などをもとにこれまでの活動を辿った。また、DVD の対象にならない演劇に関しては、ウェブで公開されているスクリプトに加え、最近のビスラマ語の政治劇のスクリプトを劇作家から入手し、検討した。これに関しては、H25 年度からの後続科研においても、引き続き調査と考察を行う予定である。（研究業績一覧の論文①）

（7）**＜マオリの「健康（hauora）」の概念に関する考察＞** ニュージーランドにおける先住民文化の再構築において鍵となる概念であるマオリの‘hauora’(健康)という問題に焦点をあて、先住民言語教育、環境問題、土地権問題、先住民文学とメディアの形成といったポストコロニアル文化形成の重要な局面を論じた。1980 年代の医療の「脱植民地化」を支える理念は、同時期の先住民言語教育運動や土地権運動と無関係でない。この時代の社会的な動きが、同時代から 1990 年代のマオリ文学にどのように反映されているか、またさらに 2000 年代以降のマオリの演劇に見られるディストピア的なヴィジョンのもつ新しい政治性が、ユートピア的議論になりがちな先住民運動や‘hauora’(健康)に関する議論の文脈のなかでもつ意味を論じた。H16-18 年度の基盤研究(B)「近代における文学と医学の交渉」(筆者は H17-18 のみ研究分担者として参加した）以来関心のあったマオリの先住民医療の調査と、H17-19 年度の若手研究(B)に端を発する先住民言語教育の調査を基盤に、先住民運動とマオリ文学の有機的な関係という歴史的な文脈に若手精鋭作家の最新の演劇作品の動向の分析を加えて包括的に論じた。（研究業績一覧の学会発表③と論文②参照。英語論文②は日本語図書①の内容と一部関連がある。）

（8）**＜オーストラリアの先住民文学についての考察と現地調査＞** 中国系アボリジニ作家アレクシス・ライト(Alexis Wright)の代表作 *Carpentaria*（2006）の舞台であるオーストラリアのクィーンズランド州北西部のカーペンタリア湾岸地域を訪ね、バークタウンで Carpentaria Land Council（カーペンタリア湾岸地域の環境の保全やアボリジニの土地権の問題を扱う機関）の活動やライトの小説に描かれる鉱山開発（バークタウンとドゥマジーの近郊にあった）をめぐる紛争の背景について小説の献辞にも名の挙げられているアボリジニのリーダーの一人である Murrandoo Yanner にインタビューを行った。また、調査期間中にノーマントン、ドゥマジーなどカーペンタリア湾地域のアボリジニ女性画家たちの展覧会がケアンズで開催されており、このアーティストたちにインタビューを行うことで、この地域の社会背景や彼女たちの作品世界とライトの小説のオーストラリア表象の関連性を考察する機会を得た。（研究業績一覧の学会発表②と論文③参照。論文③は現地調査以前に執筆した論文で、現地調査については触れていない。論文③と学会発表②の内容に一部基づく英語論文 ‘Indigenous Knowledge and Global Translation: Reconstruction of Australia through Aboriginal Imagination’ は、Routledge から出版予定の論集 *Performing Identities: The Celebration of Indigeneity* に掲載が決定しており、著者校正も済んでいるが、出版予定月が未定、論集タイトルも変更の可能性があるため、研究業績一覧には挙げていない。また、Giramondo から 2014 年上旬に出版される共著の研究書に掲載予定の招聘論文 ‘Survival, Environment and Creativity in Global Age: Alexis Wright’s *Carpentaria*’ は、2012 年に入稿済みであるが、校正はこれからである。この論文は現地調査の考察に基づき、東日本大震災以降の日本人の災害や原発問題に関する意識を根底に、オーストラリアと日本の核文学・災害文学との関わりにおいてこの小説を読むものであり、H25 年度からの後続科研の申請のき

っかけとなった論考である。）

（９）**＜キリバスにおける現地調査＞** 本科研申請当時には、最終年度のミクロネシアの調査は、キリバスではなく沖縄からの日系人移民コミュニティに関するものとなる予定であったが、これまでの調査研究の関係上、方向を修正することになった。キリバス（タラワ島）では、環境問題を扱う演劇活動や障害者の演劇集団 Te Toa Matoa の活動、クリスマス島での核実験に関する文献の予備調査を行ったが、これは本年 3 月に行ったサモア人舞台芸術家 Lemi Ponifasio へのインタビューや後続科研の課題との関わりにおいて、H25 年度以降の科研報告で発表する。

（10）**＜マオリ語教材の出版と配布＞** 日本文化をマオリの子供たちに紹介するマオリ語教材を作成、印刷発行した。付属 CD はマオリ語・英語・日本語の 3 言語版ストリーム・ムービーとテーマに関連した 13 曲の日本の歌（うち 3 曲は筆者がマオリ語翻訳したもの）を収録している。副読本として扱うための教授用資料をそえて、マオリ語トータル・イマージョンの幼稚園、小学校、中等教育機関や大学、刑務所のマオリ更生施設などに（訪問あるいは送付により）配布し、意見やフィードバックを求めた。この教材は、H17-19 年度の若手研究(B)の調査で視察したクラカウパパ・マオリ（マオリ語トータル・イマージョンの小学校）における日本をテーマにしたある学期の授業や生徒たちとの交流を通して着想を得たもので、マオリ語教育機関の教員や生徒のアンケートなどを参考に構成し、ワイカト大学のマオリ語教員であった Nātana Takurua 氏にマオリ語の監修の協力を得て作成したものである。マオリ語の教科書のなかで日本文化が紹介された例は数例あるが、ほとんどが一部に少し触れるだけであり、文化表象の誤りも多いことから、日本人による著述が必要なのではないかと考えたことも出版の動機のひとつである。研究成果の学術的な社会還元ができたのではないかと思う。（研究業績一覧の図書①）

（11）その他、下記に挙げている研究業績のうち、上記で触れなかった学会発表①は、日本とポリネシア文化との関連性のなかで日本人読者がどのようにオセアニア文学を読むかという可能性について教育の現場から考察するものである。また、学会発表②は、マルチ・リンガル（カルチュラル）なテクストのなかでの文化的翻訳の問題や英語と先住民/ローカル言語の間での翻訳や相互作用の問題を論じた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①小杉世、「オセアニアにおける演劇とコミュニティ――ニュージーランド、フィジー、ヴァヌアツを中心に――」、『ポストコロニアル・フォーメーションズ VII』、大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、(2012)、61-72

②Sei Kosugi、‘Hauora Māori: Indigenous Language Education, Environment and the Production of Literature’、『ポストコロニアル・フォーメーションズ VI』、大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、(2011)、67-78

③小杉世、「先住民の知とグローバルな翻訳――Alexis Wright の *Carpentaria* におけるアボリジニーの想像力とオーストラリアの再構築――」、『ポストコロニアル・フォーメーションズ V』、大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、(2010)、45-55

〔学会発表〕（計 3 件）

① Sei Kosugi, ‘Reading and Teaching Pacific Literature in Japan’, The 11th Triennial Conference of SPACLALS, 2011.6.25, Victoria University of Wellington, New Zealand

② Sei Kosugi, ‘Negotiation between the Local and the Global in Literary Production in Oceania: Should It Be Translated?’, Chotro III, 2010.9.13, Chail, India

③Sei Kosugi, ‘Hauora Māori: Indigenous Language Education, Environment and the Production of Literature’, The 15th Triennial ACLALAS Conference, 2010.6.10, University of Cyprus, Republic of Cyprus

〔図書〕（計 2 件）

① Sei Kosugi, Kaitoro Publishers, *He Maramataka Hapanihi*, (2012), 総頁数：マオリ語テキスト 38 + 付属 CD 内の 3 言語版テキスト 120 、音声ファイル 14 （マオリ語版テキスト監修 Nātana Takurua）

②小杉世、英宝社、「先住民言語教育・メディア・文学――ニュージーランドにおけるポストコロニアル文化の形成――」、『英語文学の越境――ポストコロニアル/カルチュラルスタディーズの視点から』、木村茂雄・山田雄三他編著、(2010)、154-175

〔その他〕

ホームページ等

http://www.geocities.jp/seikosugi/

６．研究組織

(1)研究代表者

小杉　世　（KOSUGI SEI）

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：40324834